法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

<研究ノート>マカオの聖パウロ教会と日本人：「聖ミカエル大天使」を描いた謎の絵師

宮永, 孝 / MIYANAGA, Takashi

(出版者 / Publisher)
法政大学社会学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Society and labour / 社会労働研究
(巻 / Volume)
42
(号 / Number)
4
(開始ページ / Start Page)
165
(終了ページ / End Page)
189
(発行年 / Year)
1996-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00006939

研究ノート

マカオの聖パウロ教会と日本人

——「聖ミカエル大天使」を描いた謎の絵師

宮永　孝

香港島の「マカオ・フェリー桟橋」（港澳輪船碼頭）より水中翼船に乗り、西へ行くこと六十四キロ、そこにポルトガルの植民地として約四百数十年の歴史をもつマカオ *Macau*（中国語では「澳門」[1]）がある。高速船を利用すれば、香港からマカオまでは約一時間の行程である。マカオは中国領から突出した半島と付近の二島（氹仔と路環）から成り、現在の人口は約五十万と推定されている。

そのマカオのほぼ中央部に位置する丘の上に、今日観光の目玉の一つになっている遺蹟（図版1）がある。

——大三巴牌坊（*Ruinas de S.Paulo*）

と呼ばれているものがそれである。

その意味は、「聖パウロ教会跡」である。筆者は、先年この地にしばらく滞在する機会に恵まれたので、この植民地に一層親しみを覚えるようになった。もっとも筆者の興味の中心は、マカオと日本人との関わりである。

周知のごとく、マカオはポルトガルの極東貿易とキリスト教伝導の拠点であり、ポルトガル商船は、年々当地より

日本に来航し、また宣教師らもここからわが国に渡来した。日本人の中にも商船等に便乗したり、自ら船を操ってやって来る者も少なからずいた。とくに慶長十九（一六一四）年九月、徳川幕府は日本に在留する各派（フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティノ会）の宣教師（伝導士・修道士）やキリシタン信徒を海外に放逐する暴挙に出、かれらはそれぞれマニラやマカオに送致された。とくにマカオに追放になった日本人の正確な数やその実体については、未だ不明な点を多く残している。が、慶長十九年の大追放から寛永十三（一六三六）年までの二十数年間だけでも、同地に放逐された日本人の数は優に数百名を超えるであろう。[2] 一六一八（元和四）年六月には二十一名、翌一九（元和五）年一月には四十名の日本人が、マカオに在留している、といった報告がイエズス会本部になされているという。[3]

本稿の意図は、故国を追われた日本人キリシタンの数を列挙することではなく、聖パウロ教会の歴史を瞥見し、さらにその建設に関わったとされる日本人、また当地に残留した日本人絵師（キリシタン）が描いた「聖ミカエル大天使」*The Archangel Michael* の油絵について述べるにある。

一九五二（昭和二十七）年六月、香港大学の建設学教室の教授陣と学生たちは、聖パウロ教会（三巴寺）の遺跡——教会の「正面」*fachada* を調査するためにマカオを訪れ、同地に数週間滞在した。かれらは竹で足場を掛け、建築学上の科学的調査を綿密に行ない、その成果「澳門聖保禄古堂建築之研究」（原文は英文であり、その表題を *An Architectual Survey of the Jesuit Seminary Church of St. Paul's, Macao* という。白許高 [*M.Hugo-Brunt*] の名で発表）を公にした。同論文は、教会の正面を各階ごとに精査し、図版と写真を豊富に添えたもので、きわめて精緻なすぐれた研究である。

同論文によると、マカオを初めて訪れたイエズス会士は、フランシスコ・ペレス、マヌエル・ティセイラ、アンド

レ・ピイント師らであった。かれらは一五六二年から翌六三年（永禄五～六）にかけて、教会建設にたずさわったらしい。かれらこそ聖パウロ教会の原型を造った人々である。初期の教会堂は、聖アントニオ教会の司祭館がある所に、木と石材を用いて造られたもので、形状は大きな納屋のようなものと考えられたが、程なく焼失した。一五八〇（天正八）年、こんどは現在の聖パウロ教会の遺蹟がある地点に、中国人改宗者のために小さな家屋が建てられ、その後さらにそこに小さな礼拝堂を建て増しした。一五九四（文禄三）年、日本から戻った巡察師バリニャーノによって、イエズス会の諸施設は二分され、新たに学院（コレージオ）も造られたが、これも翌九五年の火事により失なわれた。けれど同年程なく再建された。

一六〇一（慶長六）年、教会の諸施設はまたもや火災により焼失したので、マカオの市民や商人らは、きょう金して新たに教会堂を建てることにした。一六〇三（慶長八）年、聖パウロ教会と同付属の学院は、面目を一新し、偉容を現わしたが、「正面」はまだ建設中であり、それが完成するのは一六四〇（寛永十七）年のことである。当時の同教会の形状については精密な図面[4]が残されていなので不明であるが、教会の設計と監督を担当したのは、カルロ・スピノラ師であったらしい。教会には付属の学院（「神学校（セミナーリオ）」）が、大炮台（タイバオトイ）（「モンテの砦」）の下にあり、その建物は二階屋で、塔状の建物を持たなかった[5]。

聖パウロ教会の建物そのものの様式は、ポルトガル風ではなく、イタリアのイエズス会の教会に多く見られる様式を踏襲したようである。それはカルロ・スピノラ師の考えを反映したもので、東洋にローマのイエズス会風の教会を再現しようというのが狙いであった。建物の正面に至る石段（一三〇段）を例にとっても、それがアンジェロ風であるという。今日、唯一の遺物となっている建物の「正面」は、プラテレスク様式（十六世紀頃、スペインで流行した技巧的な建築様式）に似ている[6]、ということである。材料はみかげ石であり、側壁[7]はレンガ・石灰・砂・粘土などを

用い、「正面」の建設に要した費用は三万ターレス（銀貨）であった。興味を覚えるのは、正面の後背部、すなわち聖堂の部分である。その外形や内部について記述した資料は少ないが、聖パウロ教会の完成間ぎわにマカオに滞在したイギリス人旅行者ピィーター・マンディ *Peter Mundy*[8]の旅行記[9]にそれに言及したものがある。マンディは一六三六年四月、ジョン・ウェデル船長が指揮する船団に加わり、イギリスを出帆し、途中インドのゴアに寄ったのち、一六三七（寛永十四）年六月ごろ、マカオ沖に到着した。船団はマカオ近くに半年間滞泊したが、マンディは仲買人（委託販売人）としてマカオで数週間すごした。かれはスペイン語とポルトガル語ができたので地元の住民や名士らと自由に会話をたのしみ、かたわら住民の日常生活、風俗習慣などにも目をとめ、その観察を時には挿絵を添えて記録した。その記述は、人間味とユーモアに満ちており、なかなか面白い。

ピィーター・マンディが、ジョン・マウントニー（不詳）・トマス・ロビンソン（不詳）らと、国王陛下の書簡とマカオ総督ドミンゴス・ダ・カーマラ宛のそれを携えて、はしけでマカオに上陸したのは一六三七年六月二十八日（寛永十四・五・六）のことである。一行は総督官邸に寄ったのち、聖パウロ教会の学院へ行き、そこで茶菓子や果物（荔枝（リーチ））などの接待をうける。その折、マンディは聖パウロ教会の屋根に目を留めるのだが、「コレジオ（聖ポールズと呼ばれる）に隣接する教会の屋根は、これまでに見たものの中で最も美しいアーチ形のもので、すばらしいできばえである。それは中国人が造ったもので、木を刻み、不思議にも金をかぶせ、空色や朱色などのすばらしい塗料が塗ってある」[10]と、記している。教会の内部はバシリカ風に造られ、床には石を敷き、身廊外陣（げじん）・後陣・側廊・祭壇・合唱隊席・小聖堂・聖具室などを備え、また日本から運ばれて来た木材を用いて浮彫り細工をし、渦巻模様・唐草風の装飾曲線・円花飾りなどを、金色や青色の塗料で塗った[11]。

マンディは聖パウロ教会と付属の建物を見たばかりか、教会内で演じられる芝居なども観ている。一六三七年十一

月二十五日（寛永十四・十・九）、船団の幹部とマンディらは、司祭（パードレ）の招待により教会に赴くと、中国服を着た町の子供たちが演じる芝居（サビエルの生涯を劇にしたもの）を観たという。子供たちは立派な衣装と宝石などを身につけ演じるのだが、親も出席し、時間通り、教会内で上演された、と記している。[12]

ところで、マカオに放逐された日本人は、当地到着後、どのような生活を送ったのであろうか。当時、マカオのポルトガル人（図版Ⅱ）は、日本人が勇敢無比なることを聞き知っていたようで、ある者は貿易船に乗り海賊の防禦に当ったり、教会や私邸の番人となり、また教会・砲台・城壁などの建設に従事したらしい。[13] ピィーター・マンディは、マカオ滞在中に日本人（ジャポニアン）（サムライ）を見ており、その容姿をスケッチ（図版Ⅲ）しているばかりか、日本人の特徴を日記に記している。かれは次のようにいう。

> この町（マカオ――引用者）で何人かの日本人を見かけた。日本人のほとんどはキリシタンである。そうでない者は、脳天から前部にかけての頭半分を剃っている。髪の残りの部分は、小さなひもで結ばれている。（中略）日本人はやわらかい、あるいはかたい紙で鼻をかむ。かれらは小さくした紙を身につけている。鼻をかんだ紙は、きたないものとして捨てられる。また亜麻布のハンカチを持っており、それで顔や手をふく。[14]

マンディによると、サムライはサンダルをはき、そでなしの外套（羽織か？）を着、腰に刀（コタン）を差していたという。かれは耳にはさんだ日本語をいくつか書き留めている。たとえば――、

Sagashoo gooseeka＝*how Doe you?*（〝いかがでござる〟の意か）

Yungosere＝*well or good*（ようござる）

Varoogoosere=*ill or bad*（わるうござる）
Goodaree=*Com*[*e*]（こうざれ）
Mundalee=*goe*（〝行く〟の意か）
Sakee=*wyne*（酒）
Mesh=*Rice*（飯）[15]
などがそれである。

マカオに放逐された者、またキリシタン弾圧を逃れて当地に来た日本人の中には絵師・彫刻家・職人らも含まれていたようで、中には聖パウロ教会の建設に従った者もいたという。だが、目下のところ、日本人が同教会の建設に従事したという依拠すべき史料は未だ発見されていないようだ。[16] 日本人がじっさい建設に関わったのではないかという仮説を設けたのは、先に述べた白許高氏の論文が最初であろう。以下、同氏がいくつか具体例を挙げている説に耳を傾けてみよう。

まず建物の「正面」にある踊り場の付いた花崗岩の石段であるが、その工事の監督は、イエズス会員がやったとしても、全体の設計は日本人技術者の手によるものではないかという。教会入口の踊り場の敷石の大きさは、少し不揃いであることから、監督の目が十分に行き渡らず、石の大きさや様式にしても東洋風なものが感じられるというのである。白許高氏は明言はしていないが、石段の工事の監督・施行は日本人がやったものか。次に建物の「正面」に話を移すと、それは五層（階）から成っている。日本風なるものを想い出させるのは、第二層（階）と第三層（階）に見られる装飾と文字の彫刻である。第二層の正面に向いて左側の切妻の下の壁がんに、キリストの彫像があり、この彫像の頭部のうしろのあたりにアヤメの花と菊の帯状装飾が付いている（図版Ⅳ）。アヤメや菊にしても、それは純

潔を象徴するものだが、両方ともキリシタン信徒を連想させるという。第三層（階）の正面に向いて左側のコリント式の支柱の間に、七つの頭と羽根をもつ怪物の壁板がある。お祈りをしている聖母マリアがその怪物の頭を踏みつけにしておるのだが、そのマリアの体のそばに中国語で「聖母踏龍頭（シェンモウタロントー）」といった刻字がみられる（図版Ⅴ）。この銘刻の字体のまずさに注目した白許高氏は、いろいろ人に意見を徴した結果、中国人による仕事ではない、といった結論に達したようである。図版（写真）を見ても明らかであるように字体はやや不揃いな上、力強さに欠いている。中国人なら決して墓石や記念碑にせよ、このようなまずい仕事はしない。これはきっと日本人の仕事であろう、と考えたようだ。[17]

イエズス会に属する日本人が携わったと考えられるのは教会の工事だけに限ったことではない。じつは聖パウロ教会内部（聖堂）の装飾の仕事にも従事したようで、かれらはとくに聖画の制作に加わった。このことを筆者に教えたのは、マカオ滞在中に面識を得たポルトガル人マヌエゥ・ティシェイラ *Manuel Teixeira* 師（中国名・文徳泉、一九一二～）である（図版Ⅵ）。この司祭は著名な東洋学者であり、著作[18]も多いが、一日「聖ヨゼフ神学校」（*Seminário S.José*（セミナーリオ・サウン・ジ・ゼー）＝中国名・聖若瑟修院（シェンゾースシ・ウエン））に同師を訪ねたとき、宝物室といおうか絵画室に案内され、そこですばらしい聖画の数々を見せてもらった。まず筆者の眼を引いたのは、長崎ではりつけになった「日本の殉教者たち」（一六四〇年にマテウス・ファンが製作）を描いた油絵と「聖ミカエル大天使」の絵である。もっとも後者は、説明を受けるまでは、いったい誰が、いつ頃、何のために描いたものなのか、さっぱり分からなかった。「聖ミカエル大天使」は、聖パウロ教会の天井画の部分[19]をなし、板の上に描いた油彩画である。大きさは202㎝×133㎝。製作年代は十七世紀前半と推定されている（図版Ⅶ）。筆者は、平成五（一九九三）年四月八日から五月二十三日の間、池袋の「セゾン美術館」で開催された「ポルトガルと南蛮美術展」の会場で、この油絵と図らずも再会し、感慨無量であった。が、その

折、間近でこの聖画を改めてじっくり眺めた。

画像全体は、人物の顔や手の部分を除くと、黒または茶褐色が基本色である。大天使の人物像は兵士の装いをし、聖域の番人の役を演じている。大天使の頭のうしろには、光背のようなものが見られ、体の背には大きな羽根と、左手には鎖でつながれた聖体顕示台（色は金色）をもち、右手には炎のように見える剣を握っている。人物全体の装いは幻想的であり、ポスト＝ルネサンス様式[20]とのことである。なお、絵のすみずみまで目を通すと、正面から眺めて右手の画板のすみに縦に間隔をおいて五ヵ所、左手に縦に一ヵ所、人物の足もとあたりに三ヵ所、釘の穴が残っていた。これらの穴は、絵を聖堂の天井にくぎ付けにしたときの痕跡であろう。

ところで、この聖画を描いたのは誰であったのか。ティシェイラ師の教示によれば、製作者は日本を追い払われて来た次の四名のイエズス会員の内一名であるという。

(1)教弟マンシオ・タイチコ（*Mancio Taichiko*）は、一六一五年一月二十日（慶長十九・十二・二一）マカオで死亡し、聖パウロ教会内の「聖ミカエルの祭壇」近くに埋葬された。なお同人についての記述に、「流人の中、数名は間もなく死んだ。一月二十日（洋暦）、イエズス会の修士で、日本人のマンシオ・タイチコが息を引き取った。彼は秀れた画家であり、祖国の天主堂を大方装飾した」（レオン・パジェス著 吉田小五郎訳『日本切支丹宗門史（上）』岩波書店）というのがある。タイチコは肥後の宇土に生まれ、享年四十一歳であった。

(2)ペテル・チクアン（*Peter Chikuam*, ポルトガル語では *Pedro Joan*）。同人は一六二二年十一月二十八日（元和八・十・二六）マカオで死亡。

(3)トデウ（*Todeu*）。一六二七年十一月十六日（寛永四・十・九）マカオで死亡し、聖パウロ教会内の「聖ミカエルの祭壇」の近くに埋葬された。

(4)ヤコブ・ニヴァ（*Jacob Niva*〔丹羽？〕、又は*Jacobo Niua*,中国名・*Ni Yi Cheng* 尼伊陳？）は、一五七九（天正七）年中国人の父と日本女性との間に生まれ、マカオに来たのは一六〇一（慶長六）年のことである。一六三八年十月二十八日（寛永十五・九・二一）当地で死亡。享年五十九歳。

これら四名の日本人は、皆イエズス会の司祭兼画家であったジョヴァンニ・ニコロ（*Giovanni Nicolo*, 又は*Giovanni Cola*ともいう）の弟子であった。ニコロは、一五六〇（永禄三）年ナポリのノラで生まれ、のちイエズス会員となり、一五八一（天正九）年インドへ出発、翌一五八二年八月七日（天正十・七・九）マテオ・リッチともにマカオに着き[21]、一五八三年七月二十五日（天正十一・六・七）日本に到着し、直ちに下（近畿地方に対し、中国・四国・九州の西方の意）および五畿内（山城・大和・河内・和泉・摂津など畿内の五ヵ国）で絵画の技術を修行し[22]、のち神学を修めたとされる。一六〇八（慶長十三）年と一六一四（慶長十九）年にマカオと長崎に画派を興した[23]。一六一四（慶長十九）年十一月に同僚らとともにマカオに追放され、一六二六年三月十六日（寛永三・二・十八）当地において死亡した[24]。日本滞在中の一五八六年十二月（天正十四年十一月）、臼杵（大分県東部）の城に近いところにあった修練院（教会）のために、聖画「被昇天の聖母」などを板の上に油絵具で描いた[25]。

ともあれ、これら四名のイエズス会員で絵師らは、一六一四年画僧ニコロとともにマカオに放逐された後、ヨーロッパの宗教画の模写や製作に従事する一方、聖パウロ教会内の装飾の仕事にも携わったのである。

十八世紀になると、同教会を待ちうけていたものは、極東全域のための宣教師養成機関としての機能の停止と閉鎖と建物の焼失である。何よりも惜しみてあまりあるのは、教会に隣接する学院が、「元気盛んなネズミの巣[26]」と化し、数百年にわたって蓄積した文書類が、かれらに食い荒され、さらに追い討ちをかけるように一八三五年一月二十六日（天保五・十二・二八）の夕方六時ごろ[27]、学院と教会がともに火災によって失なわれたことである。十八世紀末にな

ると学院は兵営として利用されていたのだが、火事が起った当日、どういうわけか、兵士らは大量の薪を学院の台所の近くに積み上げていて、そこから火が出た。一体なぜそんな所から火を出さねばならなかったのか判然としないが、いずれにせよ、それが火元となって、学院の建物全体を火炎に包んだものらしい。ベント・ダ・フランカの『マカオ史資料』（一八八八年）や白許高氏とティシェイラ師の論文[28]に出火当時の様子を伝える「海事・植民局」の記録が引用されている。

「火炎が起ったのは、ちょうど夕方六時を打った時であった。が、火の手は早く、八時十五分には、ルイ十四世の寛大さに多くを負うている荘厳な学院は、灰じんに帰した」

このときの火炎は、聖パウロ教会をも呑み込み、同教会は、厚い側壁と「前面」と花崗岩の石段だけを残す無残な姿となったことは言うまでもない。そしてこの火事により、聖人や殉教者の遺物[29]を除くと、極東における宣教師らの貴重な報告書などは、すべて灰になってしまった。このときの火災から約二年後の一八三七年五月（天保八・四）、聖パウロ教会は墓地として利用されることになり、焼けた教会の身廊に小さな礼拝堂が造られ、死者が埋葬される前に一時そこに安置された。またヒマラヤ杉なども植えられた。しかし、墓地として使用されたのは、一八五四年十一月上旬（嘉永七・九中旬）までの約二十年間である。やがて遺骨は堀り起され、新しい墓地[30]に改葬された。墓石はマニラに運ばれ、小さく砕いて舗石や船の底荷（バラスト）などに用いられたのではないか[31]、と考えられている。

さて、「聖ミカエル大天使」の聖画を描いたのは、画僧ジョヴァンニ・ニコロの弟子四名のうち一人であることは、先に述べた通りである。が、それを特定することは、史料不足から容易ではないし、じっさい不可能である。四人とも日本にいた時分、イエズス会関係の学院で油絵・膠画（にかわ）・銅版画の技法をひととおり学んだとされるが、中でもヤコブ・ニヴァ（丹羽？）は最も絵画をよくする優れた絵かきであった。かれは慶長六（一六〇一）年の終りごろか、

翌年の初頭にバリニャーニの命によりマカオに渡ったが、それは聖パウロ教会の装飾を助けるためであった。[32]『澳門記略』（下巻、二一六頁）に「凡廟所奉天主有誕生図被難図飛昇図」という条りがあり、マカオの教会にキリスト生誕の絵、受難の絵、飛昇天の絵などが存在したことを伝えている。マカオの教会は、いずれも火災により焼失と再建をくり返しているが、ヤコブ・ニヴァがマカオにおいて描いた聖画について、『一六〇一年度支那年報』（原本はパリの国立図書館にある）は次のように伝えている。

「焼失せし二枚の絵の代りに、新規に別の二枚を作れり、一枚は聖母被昇天の図にして教会の奉献せしものに係る。他の一枚は一万一千の処女の殉教図なり。これらは日本人の画家（ヤコブ・ニヴァのこと――引用者）の筆にして、吾々が同宿（Dogico）と呼べる者にて、豫てワリニャーノ師が支那に滞留せる吾々の許に送り越せし人にてありき。同師は彼に数種の作画を依嘱し、且つそれらの絵画が新しく改宗せる支那人に対し、従来存在せる種々の偶像に代らんことを所期し給へり」[33]

ヤコブ・ニヴァはこれらの製作の仕事をおえた後、慶長七（一六〇二）年宣教師マノエル・デアズに伴われ北京に赴き、そこで伝導用の聖画・祭壇画などを描き、再びマカオに戻り製作に従った。

一六〇三（慶長八、萬暦三十一、二）年ごろ、イエズス会士らは関閘（クアンチャー）に近い小島青洲（チェンチョウ）（*ilha Verde* イーリヤ・ヴェールデ〝緑の島〟の意、現在は陸地とつながっている）に、そまつな小屋数軒と礼拝堂を建てたが、中国人はこれを城郭とみなした。このときマカオに滞在していたサラセン人の官吏にそそのかされた暴徒らは、この礼拝堂を襲い、そこから出て来た日本人の下僕やポルトガル人と戦闘になり、聖堂は焼失した。[34]が、のち再建され、ついで破却された。この天主堂内を飾った聖画の製作もニコロの弟子たち（日本人）の仕事と想像されている。

ところで、「聖ミカエル大天使」の油絵と類似した絵（膠画）が、終戦まで長崎浦上天主堂に在ったが、おそらく

原爆で焼失したものであろう（図版Ⅷ）。それは「聖ミカエル画像」と称せられるもので、大天使ミカエルが右手に長槍を、左手には善悪の秤をもち、悪鬼を踏みつけている絵である。この日本画は、厳しい迫害の中でキリシタンが隠し通し秘蔵していたものらしい。[35] 西村貞の『日本初期洋画の研究』によると、「鳥の子（雁皮と楮をまぜてすいた和紙――引用者）に、地塗りを施し、具入り絵具をもって描かれている。細部は面相筆を使用して極めて緻密なる仕上げを為し、顔料の一部分には岩絵具（天然の鉱物を細粉し、絵の具としたもの――引用者）を用」いたものとのことである。「聖ヨゼフ神学校」に残る「聖ミカエル大天使」の油彩画は、いったい誰が描いたものなのか。筆者は残念ながらその謎の製作者の氏名を明らかにできず、マカオにキリシタン絵師が描いた聖画が存在することだけに意見を留めた。今後の調査が待たれる。

注

（1）マカオ（*Macau*）の名称については、中国の書（『澳門紀略』『明史』）では「澳門」又は「濠鏡澳」と称し、わが江戸時代においては、マカオのことを「阿媽港国」とか「天川」と呼んでいた（『通航一覧』）。ポルトガルのマカオ植民地の由来について若干ふれると、ポルトガルがマカオに居留地を保有するようになったのは、一五五七年（嘉靖三十六年）以後のことであるらしい。当時、広東・浙江沿岸に海賊が跳梁し、ポルトガル人が中国官憲に協力し、その討伐に功があったので、マカオに居住を許されたようである。その後、貿易に対する一種の課税を支払うようになり、一五七三年（萬暦元年）にマカオと香山縣とをつなぐ境（「蓮花莖」）に「関閘」（関所）が設けられ、ポルトガル人の自治を黙認するに至った。そしてマカオがポルトガルの租借地（領土）となったのは、一八八七年（光緒十三年）の葡清リスボン条約によってである（植田捷雄『支那に於ける租界の研究』厳松堂書店、昭和十六年九月）。このポルトガルの植民地も、一九九九年十二月中国政府に返還される。

（2）たとえば、慶長十九（一六一四）年南蛮人の出家をことごとく追放に決し、ポルトガル船の来航を禁じたこと（『通航一覧巻之百九十二）、さらに寛永十三（一六三六）年ポルトガル人系男女子供ら約三百名（『蘭館日誌』Japan Daghregister, 一

六三六・一〇・二〇〜二二付によると、二百八十七名。『長崎夜話草』の記事「蛮人之子孫遠流之事」にも同じ数字が挙げられている）がマカオに放逐された。

（3）岩生成一「媽港のゼスス会コレジオに於ける日本人について」（『歴史地理』第七十一巻第五号所収）。

（4）聖パウロ教会と隣接する建物（学院「神学校」）の姿を写した版画として比較的よいものに、Begin ende Voortgangh van de Vereenighde Nederlantsche geoctroyeerde Oost-Indische Compagnie, 2 vols, Amsterdam, 1645 や François Valentijn の Oud en Nieuw Ost-Indië, 1726, Vol. IV. 所収の銅版画、『澳門記略』（上巻、光緒庚辰（クアンシカンチエン）〔一八八〇年〕重刊）の巻頭に添えられている木版画などがある。

（5）An Architechtural Survey of the Jesuit Seminary Church of St. Paul's, Macao, M.Hugo-Brunt (Journal of Oriental Studies Printed from Vol.I No.2. July 1954, University of Hong Kong 所収)、三三二頁。なお、旅行者ペイター・マンディによると、マカオの教会に尖頭や高い塔が付けられなかったのは、台風や強風への配慮からであるという。

（6）注（5）の論文、三三六頁を参照。

（7）焼け残った聖パウロ教会の側面部の「壁」は、一八三八（天保九）年までそのままになっていたが、この年破壊された（白許高論文、三四三頁）。なお、The Treaty Ports of China and Japan, Compiled and edited by N.B.Dennys, Trübner and Co., London, A.Shortrede and Co., Hong Kong, 1867 によると、この壁は厚く、堅牢にできており、切り崩したとき二十五フィート（約七、八メートル）の高さにまでなったという。時にここに信者の遺体を埋め込んだ。

（8）ピィーター・マンディは、一五九六年（文禄五年・慶長元年）英国コンウォールの Penryn で生まれた。没年については不詳。父と叔父は pilchard（ニシン科）を商っていたというから、漁師の息子か。

（9）すなわち The Travels of Peter Mundy (1608-1667), 5 vols. The Hakluyt Society, London, 1907-1936 のこと。この大部な旅行記は、一九六七年に Kraus Reprint Limited (Neudeln／Liechtenstein) からリプリント版が出、また C.R.Boxer が編んだ Seventeenth Century Macau in Contemporary Documents and Illustrations, Heineman

(Asia) Hong Kong, Kuala Lumpur, Singapore 1984 の中に、マカオ紀行の部分のみが採録されている。

(10) Kraus Reprint Limited 版、一六二～一六三頁。なお、丘にそびえる聖パウロ教会の昔日の壮麗な姿を彷彿させるものとして、『澳門紀略』(アオマンキリャク)(下巻)の「澳蕃篇(アオマンピェン)」に次のような記事がみられる。

〔寺〕首〔三巴〕(聖パウロ寺院) 在澳東北、依山為之、高数尋、屋側啓門、制狭長、石作雕鏤、金碧照耀、上如覆幾、旁綺疏瑰麗、所奉日天母、名瑪利亞、貌如少女、抱一嬰兒、日天主耶蘇、衣非縫製、自頂被體、皆采飾平画、障以琉璃、望之如塑、旁貌三十許人、左手執渾天儀、右手指若論説状、蛾眉堅者如怒、揚者如喜、耳重輪、鼻降準、目若瞩口若聲、上有樓、蔵諸楽器、有〔定時台〕、巨鐘覆其下、立飛仙台隅、為撃撞形、以機鞲之、按時発響(二一三頁、原文には区読点はついていない)

また同教会の「学院」には「時計(ローリョオ)」も備えられ、時を伝えていたが、それはルイ十四世からの贈物であった(Bento da França 著 Subsidios para a Historia de Macau, Imprensa Nacional, Lisboa, 1888 の一七二頁及び Andrew Ljungstedt 著 Contribution to an Historical Sketch of the Portuguese Settlements in China, principally of Macao, of the Portuguese Envoys & Ambassadors to China, of the Roman Catholic Mission in China of the Papal Legates to China, Macao China, 1832 の五五頁を参照)。

(11) 白許高論文、三三二～三三三頁を参照。

(12) 注(10)の版本、二七四～二七五頁。

(13) 矢野仁一「万暦時代マカオの日本人駆逐に就いて」(『支那近代外国関係研究』所収、弘文堂書房、昭和三年九月)、四二六～四二七頁。

(14) 注(10)の版本、二九四～二九五頁。

(15) 同右。

(16) 松田毅一「歴史の博物館マカオ」(『黄金のゴア盛衰記』所収、中央公論社、昭和五十二年九月)、一二八頁。

(17) 白許高論文、三三八頁。

(18) Exposição Bibliografica, P.Manuel Teixeira, Direcção dos Serviços de Educação de Macau, Biblioteca

do Complexo Escolar de Macau, Macau, Novembro de 1986（「著作展覧、文徳泉神父、澳門教育司、澳門中学図書館、澳門一九八六年十一月）によると、同師の著作数は大小合わせて一二三冊ある。

（19）カタログ『ポルトガルと南蛮文化展――めざせ、東方の国々』（日本放送協会、平成五年）、一七六頁にある同画の解説を参照。

（20）同右。

（21）ティシェイラ師の教示による。

（22）松田毅一／川崎桃太訳『フロイス　日本史　8』（中央公論社、昭和五十七年一月）、一九八頁の「注」を参照。

（23）注（21）に同じ。

（24）注（22）に同じ。

（25）注（22）の一八五頁。

（26）José de Aquino Guimaraes e Freitas: Memoria sobre Macao, na Real Imprensa da Universidade, Coimbra, 1828の一二頁に、「今、たくましいネズミの住居として役立っている」とある。

（27）Fr.Manuel Teixeira: The Fourth Centenary of The Jesuits at Macao, Macau 1964, 二五頁。

（28）同右。

（29）教会内には、秘かに日本から運び込まれたキリシタン殉教者やコーチシナ（ヴェトナム瑕南部地域）における殉教者約七十名の遺骨、フランシス・ザビエルの腕（上膊骨）の一部などが保管されていた（C.A.Montalto de Jesus: Historic Macao, Salesian Printing Press and Tipografia Mercantil 1926, 六一頁）。ちなみにこれら殉教者の遺骨は現在、マカオのコロアネ（Coloane）島の「聖フランシスコ・ザベリオ教会」（The Chapel of St.Xavier）に収蔵されている。（ステファノ・小田善三郎編『マカオに眠るキリシタン殉教者』聖パウロ修道会八王寺修学院刊、昭和六十一年三月）及び Hong Kong Standard Newspaper, Macao Travel Talk [8, 9] を参照。

（30）一六三〇年代、中国人の墓地は、マカオ郊外½マイルの内陸部寄りに在った、という記述が、P・マンディのマカオ紀行

にみられる。なおポルトガル人（ローマカトリック教徒）の墓地は、「聖ミグエルの墓地」(Cimiterio de S.Miguel)と呼ばれ、墓地通りに在る。一八五二（寛永五）年ポルトガル人が寄付を募って求めたもので、一八五四（寛永七）年埋葬が開始され、一八六五（慶応元）年五月の時点で四三〇九体葬られた。おそらく聖パウロ教会の遺骨は、この墓地に移されたものか。The Treaty Ports of China and Japan, compiled and edited by N.B.Dennys, Trübner and co., London, A. Shortrede and Co., Hong Kong, 1867, 二二六頁を参照。

(31) C.R.Boxer: Japanese Christians buried in the Jesuit College Church of São Paulo at Macau (Monument Nipponica, vol.I, 1938, Sophia University, Tokyo), 二六六頁を参照。なお同論文に、一六四八（正保五、慶安元）年から一七二六（享保一一）年の間に、マカオの聖パウロ教会内に葬られたキリシタン（男女）二十五名の氏名と埋葬地点を明かす史料が引用されている。それはリスボンの「植民地古文書館」Arquivo Colonial に在るもので、「この教会に埋葬された俗衆である死者」(Dos defuntos Seculares que estão enterrados nesta Igreja) という表題が付いている。

(32) 西村貞『日本初期洋画の研究』（全国書房、昭和二十年一月）、一〇四～一〇五頁。

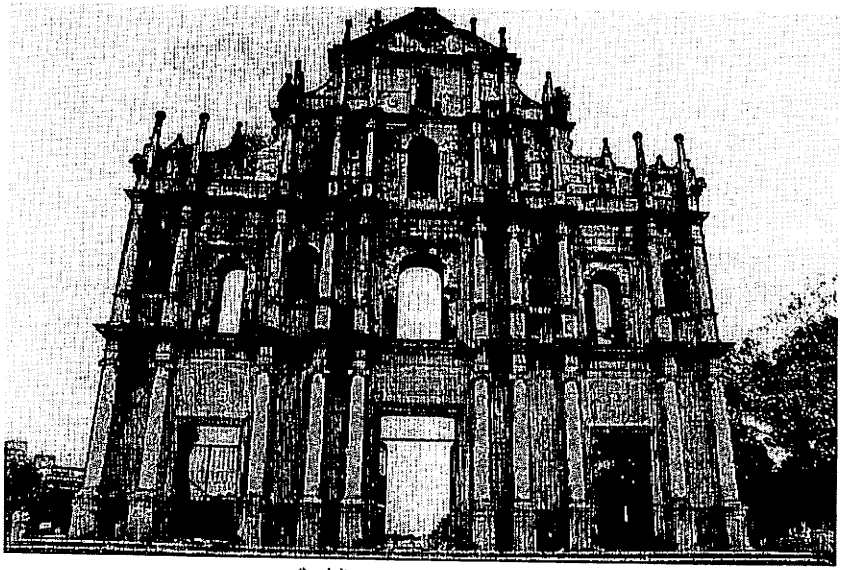
(33) 同右。

(34) Andrew Ljungstedt: Contribution to an Historical Sketch of the Portuguese Settlement in China, Macao China, 1832, 五五頁。

(35) 古賀十二郎『長崎絵画全史』（北光書房、昭和十九年八月）、六一頁。

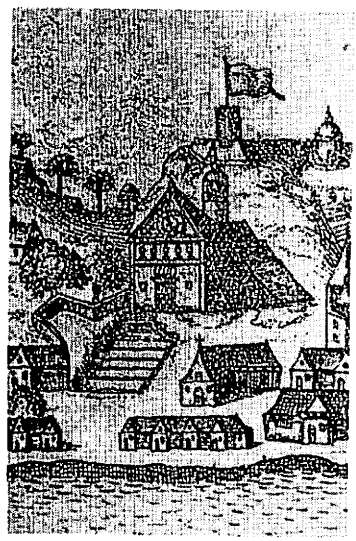
〔追記〕 本稿を草するに際して、マヌエゥ・ティシェイラ師の教示を得、文献史料面では手持のものを利用した外、早稲田大学中央図書館、上智大学図書館「キリシタン文庫」、財団邦人東洋文庫等のお世話になりました。記して謝意を表します。

前号に載せた拙稿の訂正――パークスはつんぼさじきに置かれていたことに激怒し（一〇九頁）――→パークスは無視されていたことに激怒し……。



聖パウロ教会（三巴寺（サームシュ））の「正面」（図版Ⅰ）［著者撮影］

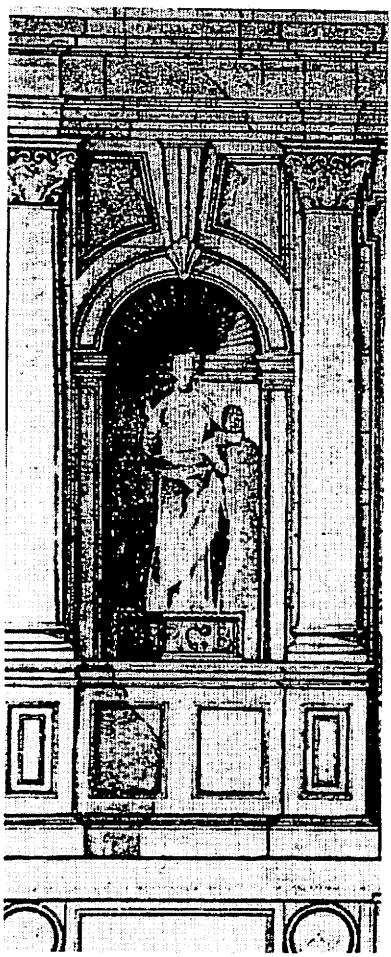
○内が19世紀の聖パウロ教会（三巴寺）と付属の施設
（『澳門紀略』上巻，光緒康辰重刊より）



17世紀当時の聖パウロ教会と付属の建物

ピィター・マンディがマカオ滞在中に描いた日本人のスケッチ
（図版Ⅲ）

マカオのポルトガル人
（『澳門紀略』上巻，光緒康辰重刊より）
（図版Ⅱ）

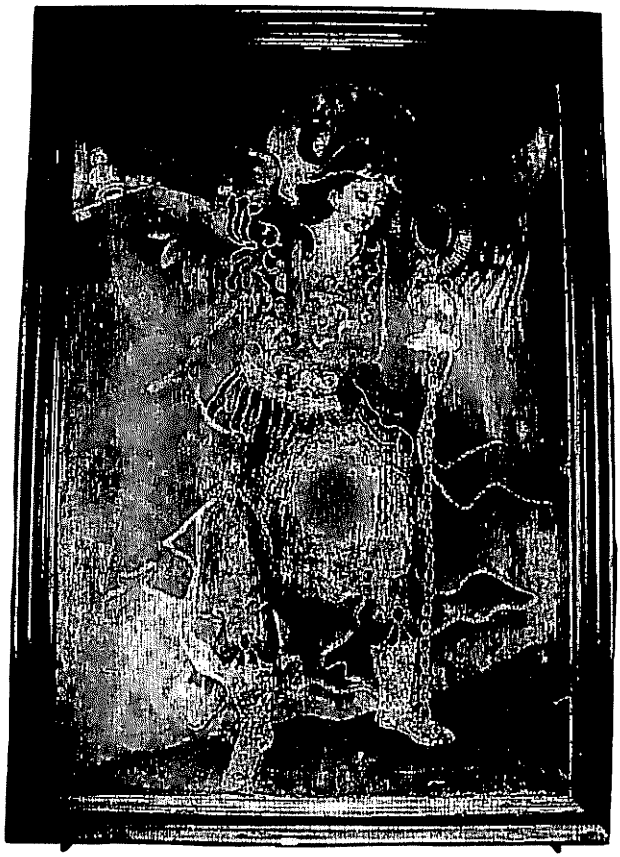


（図版Ⅳ）

（図版Ⅴ）

マカオに放逐された日本人の仕事の跡ではないかといわれるもの。
〔『澳門聖保禄古堂建築之研究』より）

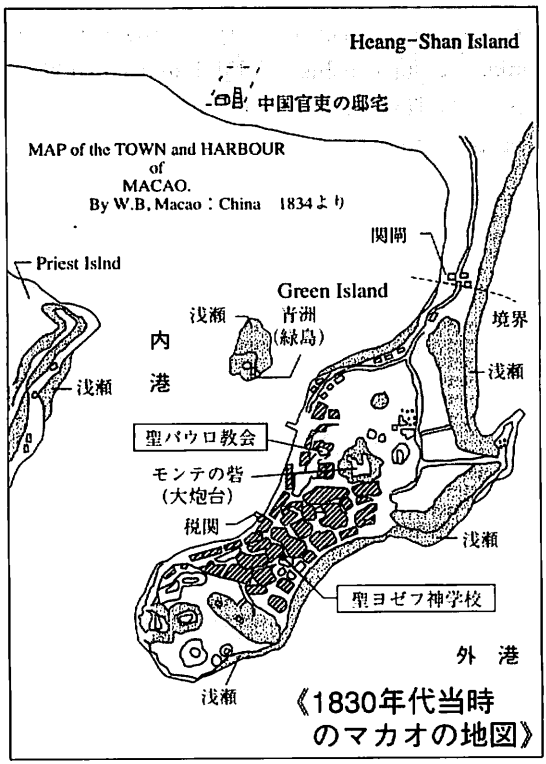
マヌエゥ・ティシェイラ師
カモンエスの胸像前で
筆者が撮影したもの。
(図版VI)

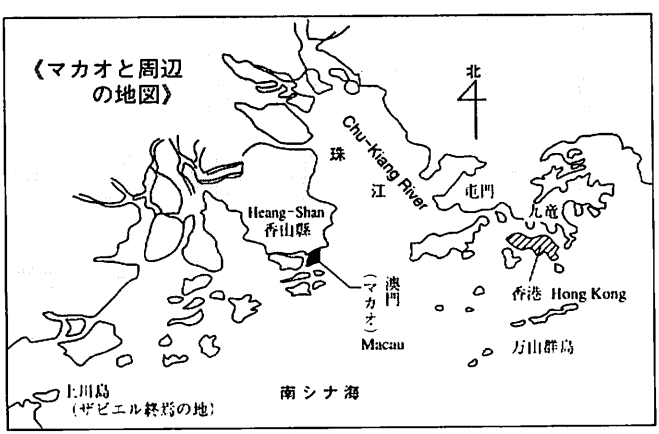


マカオの「聖ヨゼフ神学校」に収蔵
されている「聖ミカエル大天使」
（202 cm×133 cm）の油彩画
（図版Ⅶ）［筆者撮影］

「聖ミカエル画像」（長崎浦上天主堂所蔵，原爆で焼失？）
（西村貞『日本初期洋画の研究』より）
（図版Ⅷ）

《1830 年代当時の
マカオの地図》





A Japanese Exile in Macau: The Paingting of St. Michael in Seminário S. José.

Nawadays Macau (澳門), a Portuguese colony, attracts many visitors from all over the world. This city was once called "the City of Death" in the last century, but it is going to be recreated a new, modern city, sprouting dozens of new buildings here and there. I visited Macau once and enjoyed staying there. What attracted my attention and impressed me deeply was the old remains of the façade of St. Paul's church located almost in the middle of the city, where quite a few Japanese Christians were buried; reportedly they helped to build it many centuries ago. The façade maintains the solemnity and beauty as well. During my brief stay in Macau, I was happy to make the acquaintance of Fr. Manuel Teixeira, an eminent orientalist and priest, who not only showed me round the historic spots but enlightened me greatly as to the history of the city. I well remember I was lost in admiration of two oil-paingtings, one of which shows the crucification of the Japanese Christians at Nagasaki and other of St. Michael, the Archangel in Seminário S.José (聖若瑟修院). As regards the latter, the name of the painter remains unknown. However, according to Fr.M.Teixeira, one of the four Japanese Christians, all of whom were the disciples of Giovanni Nicolo (1560～1626), a famous Italian priest and master in the art of sacred paingtings, painted it.

Supposedly the painters are: (1) Mancio Taichiku (?～1615), born in Udo (宇土), in the province of Higo (肥後国), died in Macau. (2) Peter Chikuam alias Pedro Joãn (?～1622), died in Macau. (3) Todeu (?～1638), died in Macau. (4)Yacob Niva (丹羽？) alias Yacobo Niva (？～1638), died in Macau. It is said Yacob Niva towered above others as a painter. This article deals

with the Japanese Christians in Macau and with the painting of the Archangel. The identity of the artist, however, still remains unknown. In conclusion, I'd like to express my deep indebtedness to Fr.M.Texiera and some of the university libraries in Tokyo for providing assistance during my research.

30th November 1995

Takashi Miyanaga